

私の人権

加古川市立浜の宮中学校 一年 奥谷 穂香

この人権作文を書くのにどんなテーマで書こうか考えていたら、母が金属のついた小さなチューブを神棚からおろして見せてくれました。6年前まで私のおなかに入っていた、腹膜透析のためのチューブです。腎臓移植手術の時に私の両親が、「6年近くも穂香の命をつないでくれたチューブだから」と病院の先生にもらった物です。

私は、両側性低形成腎という生まれつきの病気で腎不全でした。そのため、ミルクも母乳も自分の力では、ほとんど飲めず、体重が増えませんでした。栄養を補うために、鼻から胃に経管栄養のチューブを入れて特別なミルクを注入していました。鼻から出ているチューブが抜けないようにほっぺたにシールでとめるのですが母がいつもそのシールをハート形に切ってくれました。なぜハート形にしていたのかと母に聞くと、「出会う人が穂香の鼻にチューブが入っているのを見て、驚いたり、かわいそうに思ったりしないように」と話してくれました。

たとえ病気を抱えていても、自分らしく、たくましく成長してほしいという母の願いを知りました。その母の願いとは、うらはらに、栄養チューブのことを興味本位で聞いてくる人もいたそうです。そのころの記憶は全くありませんが、その話を聞いて私は母の思いに泣いてしまいました。知らない人に病気のことをあれこれ聞かれるのは、いやな気持ちになるからです。

当時の母も泣きたい気持ちになったこともあったそうですが、逆に明るく「こんなに小さいのにおなかにもチューブが入っていて病気と闘っているんですよ。えらいでしょ？応援してあげてくださいね」と返したそうです。そう言う「そうなんですね。えらいね。お母さんもがんばっているのですね」と大抵の人がはげましてくれました。

しかし中には声をかけてくることなく、指を指して何か言っていたり、じろじろと見られたりしたこともあったそうです。母は「偏見を持ったり差別をしたりするのは、その人のことを外見しか見ておらず、よく知らないからだ。身近に病気があつてがんばっている人がいる人なら絶対にそんなことはしない」と言います。

私もその通りだと思います。初めて会った人が怖そうだな、きつそうだなと思っていても話をしたり、いっしょに過ごしたりするうちに仲良くなるのと同じだと思います。病気や障害も含めて、その人のことをよく知ることが、相手を大切にする、つまり人権を尊重する第一歩だと思います。

小学校1年生の6月に腎臓移植をして自力で食事ができるようになり、栄

養チューブも腹膜透析チューブも外すことができました。体は元気になったけど、他の人より体が小さかったり、移植した腎臓を守るためにしてはいけない運動があったりします。そのことを担任の先生が全校生に伝えてくれました。私のことをみんなが知ってくれていると、安心して過ごせます。

これも私の人権が尊重されているといえると思います。学校では黒板を消していると、届かない所は友達が手伝ってくれたり、病院に入院中もオンラインで授業が受けられるように先生方が協力してくださったりしました。感謝の気持ちでいっぱいです。

せっかく元気になったのだから、体が小さい私にもできることは何があるだろうと考え、家事の手伝いをしたり、学校では給食当番の友達の分の給食を運んだりしています。病気や障害があっても特別扱いばかりで何もさせてもらえないのではなく、その人が社会の一員として認められ、できることをさせてもらうのも大切な人権の一つだと思います。

今は、まだ身近で私ができることしか思いつきませんが、たくさんの人に支えられた私だからこそ、できることを探したり、増やしたりしながら生きていきたいと思いました。